

台湾日本語言文藝研究学会
第十二回定例学会

日本語文化研究国際学術シンポジウム
南台湾から世界へ—新世紀への展望と行動

研 討 會 手 冊

一〇一年十一月二十四日



台灣日本語言文藝研究学会第 12 回定例学会

日本語・文芸・文化研究学会国際学術シンポジウム

テーマ: 南台湾から世界へ — 新世紀への展望と行動

日時: 2012 年 11 月 24 日(土) 場所: 長榮大学第一教学ビル3F視聴センター

主催: 台灣日本語言文藝研究學會、長榮大學應用日語研究所・應用日語學系

後援: 長榮大學、財團法人亞太文經學術基金會



8:30-9:00	受付		
9:00-9:20	開会の辞: 台湾日本語言文藝研究学会 謝逸朗名誉理事長 / 米山禎一理事長		
9:20-10:40	講演: 錦仁(新潟大学大学院現代社会文化研究科教授) 「なんのための和歌か——『古今集』仮名序の思想」		
10:40-10:50	休憩		
10:50-12:10	講演: 太田登(台湾大學日本語文學系教授) 「与謝野晶子における〈産む性〉」		
12:10-12:30	会員大会		
12:30-13:30	昼食		
研究発表: 20分 質疑応答: 10分	<第一会場 日本語学> 司会: 辜玉茹(中國醫藥大學副教授)	<第二会場 日本語学> 司会: 武知正晃(台灣首府大學應用外語學系助理教授)	
13:30	蘇雅玲(長榮大學應用日語學系助理教授) 「日本語学習者における格助詞『を』『に』の習得過程に関する一考察 —台湾人学習者および韓国人学習者を対象に—」	蔡佳樹(宇都宮大學國際學研究科博士班) 「日文中訳における重層構造の取り扱いについて —長い連体修飾構造の翻訳における問題点を中心に—」	
14:00	兒島慶治(香港中文大學日本研究學系 Senior Instructor) 「正倉院文書『種々葉帳』の異体字について —中間報告—」	歐薇蕪(和春技術學院應用外語商務日文組助理教授)「日中翻訳作品から見た言語・文化の差異 —台湾を中心として—」	
14:30	蘇鈺甯(長榮大學應用日語學系助理教授)「中日語彙対照研究 —身体語彙「顔」を用いた語の意味分布傾向調査—」	林志原(義守大學應用日語系助理教授)「事象把握と意味拡張 —現代日本語の『テイル』を中心として—」	
15:00	休憩		
15:30	黃愛玲(高雄第一科技大學應用日語學系助理教授)「中日語彙使用と文化概念への一考察—『お宅』と『お家派』を中心に—」	黑瀨惠美(長榮大學應用日語學系助理教授)「中日両語間の人称翻訳にみられる加訳・減訳・変換について」	
16:00	吳幸芬(長榮大學應用日語學系助理教授)「談話の焦点の音声的実現について—台語の変調音節の音声的実現を中心として—」	何志明(香港中文大學日本研究學科副教授)「日本語複合動詞の使用実態調査—週刊誌に現れる複合動詞を中心に—」	
16:30	千島英一(熊本大学大学院社会文化科学研究科教授) 「“井”(どんぶり)字の中国語音をめぐって」	張瓊瑜(台中科技大學應用日語系副教授)「日中両言語の受身表現の使用に関する一考察 —テレビドラマ『不毛地帯』の分析を通して—」	
研究発表: 20分 質疑応答: 10分	<第三会場 日本語教育・語学> 司会: 黒田秀教 (明道大學應用日語學系助理教授)	<第四会場 日本文学> 司会: 楊錦昌 (輔仁大學日文學系副教授)	<第五会場 日本産業・社会> 司会: 李守愛 (義守大學應用日語學系主任)
13:30	井上ゆみ (香港中文大學日本研究學科高級講師) 「授受動詞の理解と教え方を考える」	石井周 (長榮大學應用日語學系助理教授) 「白井新太郎の漢詩における『仗劍』」	堀高志(台灣首府大學應用外語學系日語組講師)「台湾のキャッチアップと技術革新の現状」
14:00	黃士瑩(長榮大學應用日語學系助理教授) 「台湾人日本語学習者による意見表明に関する研究 —母語の影響を中心に—」	渡邊朝美(熊本大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程)「蘇曼殊の小説作品に見られる近代性について」	藤井可(熊本市西区役所医師、佐賀大学医学部非常勤講師)「台湾の動物慰霊碑 —日本の動物慰霊思想 再考—」
14:30	原野由理子(台南応用科技大学企業管理系兼任講師)「海外での日本文化教育とその応用 —台湾の大学及び社会人教育を例として—」	林憲宏(長榮大學應用日語學系助理教授)「日本統治時期における台湾の外地文学について —西川満の歴史小説を例として—」	金秀英(實踐大學高雄校區應用日文學系助理教授) 張郁愛(實踐大學高雄校區應用日文學系講師)「海外実習を通して身に付ける異文化対応能力」
15:00	休憩		
15:30	篠原信行(台湾大學日本語文學系講師)「中国語『S想V』構文に対応する日本語について」	劉盈慧(長榮大學大衆傳播學系助理教授)「東野圭吾文字中の影像建構與影視魅力」	莊幸美 (興國管理學院企業管理學科助理教授) 「グローバル化する日本の中小企業」
16:00	施淑惠(大葉大學應用日語學系助理教授)「日本語・台閩語における連語の対照研究 —『取り外し動詞(去除動詞)と物名詞との組合せ』を中心に—」	陳采玉 (高苑科技大學應用外語系助理教授) 「『荒地』詩與台灣詩的關係」	謝欣純(長榮大學應用日語學系講師)「台南孔子廟文化園區における観光日本語授業の試み —街づくりの視点による観光ガイドの養成—」
16:30	白寄まゆみ(淑徳大学国際コミュニケーション学部准教授)「直接法による日本語教育における『導入』に対する一考察」	米山禎一 (長榮大學應用日語學系教授) 「有島武郎論—信仰と棄教の狭間で—」	劉伯雯(高雄第一科技大學應用日語學系副教授) 「日本鉄道企業の電子マネー戦略」
17:00	理事監事会議		

台湾日本語言文藝研究学会第十二回定例学会

日本語文化研究国際学術シンポジウム

南台湾から世界へ—新世紀への展望と行動

目 録

壹、演 講

- なんのための和歌か——『古今集』仮名序の思想…………… 錦 仁教授…………… p. 1
与謝野晶子における〈産む性〉…………… 太田登教授…………… p. 2

貳、分科発表

一、日本語学（第一会場 1301 教室）

1. 日本語学習者における格助詞「を」「に」の習得過程に関する一考察
—台湾人学習者および韓国人学習者を対象に—…………… 蘇 雅玲…………… p. 1
2. 正倉院文書「種々葉帳」の異体字について—中間報告…………… 兒島慶治…………… p. 8
3. 中日語彙対照研究—身体語彙「顔」を用いた語の意味分布傾向調査…………… 蘇 鈺甯…………… p. 19
4. 中日語彙使用と文化概念への一考察—「お宅」と「お家派」を中心に…………… 黄 愛玲…………… p. 29
5. 談話の焦点の音声的実現について—台語の変調音節の音声的実現を中心として…………… 吳 幸芬…………… p. 37
6. “井”（どんぶり）字の中国語音をめぐって…………… 千島英一…………… p. 46

二、日本語学（第二会場 1303 教室）

1. 日文中訳における重層構造の取り扱いについて
—長い連体修飾構造の翻訳における問題点を中心に—…………… 蔡 佳樹…………… p. 47
2. 日中翻訳作品から見た言語・文化の差異—台湾を中心として…………… 歐 薇蘋…………… p. 49
3. 事象把握と意味拡張—現代日本語の「テイル」を中心として…………… 林 志原…………… p. 50
4. 中日両語間の人称翻訳にみられる加訳・減訳・変換について…………… 黒瀬恵美…………… p. 60
5. 日本語複合動詞の使用実態調査—週刊誌に現れる複合動詞を中心に…………… 何 志明…………… p. 75
6. 日中両言語の受身表現の使用に関する一考察
—テレビドラマ「不毛地帯」の分析を通して…………… 張 瓊瑜…………… p. 86

三、日本語教育・語学（第三会場 1304 教室）

1. 授受動詞の理解と教え方を考える…………… 井上ゆみ…………… p. 87
2. 台湾人日本語学習者による意見表明に関する研究—母語の影響を中心に…………… 黄 士瑩…………… p. 94
3. 海外での日本文化教育とその応用—台湾の大学及び社会人教育を例として…………… 原野由理子…………… p. 107
4. 中国語「S想V」構文に対応する日本語について…………… 篠原信行…………… p. 117
5. 日本語・台閩語における連語の対照研究
—「取り外し動詞（去除動詞）と物名詞との組合せ」を中心に…………… 施 淑惠…………… p. 125
6. 直接法による日本語教育における「導入」に対する一考察…………… 白寄まゆみ…………… p. 139

四、日本文學（第四會場 1308 教室）

1. 白井新太郎の漢詩における「仗劍」…………… 石井 周…………… p.143
2. 蘇曼殊の小説作品に見られる近代性について…………… 渡邊朝美…………… p.150
3. 日本統治時期における台湾の外地文学について
—西川満の歴史小説を例として—…………… 林 憲宏…………… p.151
4. 東野圭吾文字中的影像建構與影視魅力…………… 劉 盈慧…………… p.166
5. 「荒地」詩與台灣詩的關係…………… 陳 采玉…………… p.182
6. 有島武郎論—信仰と棄教の狭間で—…………… 米山禎一…………… p.194

五、日本産業・社會（第五會場 1201 教室）

1. 台湾のキャッチアップと技術革新の現状…………… 堀 高志…………… p.205
2. 台湾の動物慰霊碑—日本の動物慰霊思想再考—…………… 藤井 可…………… p.213
3. 海外実習を通して身に付ける異文化対応能力…………… 金秀英、張郁雯…………… p.218
4. グローバル化する日本の中小企業…………… 莊 幸美…………… p.232
5. 台南孔子廟文化園區における観光日本語授業の試み
—街づくりの視点による観光ガイドの養成—…………… 謝 欣純…………… p.242
6. 日本鉄道企業の電子マネー戦略…………… 劉 伯雯…………… p.249

日本語学
発表資料

第二会場
1303 教室

日本語複合動詞の使用実態調査 —週刊誌に現れる複合動詞を中心に—

何 志明

香港中文大學日本研究學系 副教授

キーワード: 複合動詞、週刊誌、出現頻度、データベース、調査

1 はじめに

本研究の目的は、主に時事問題を取り扱う専門誌である、朝日新聞出版発行の週刊誌『アエラ』(AERA)を調査し、日本語複合動詞の使用実態を明らかにすることである。日本語学習者にとって、複合動詞は習得が難しいものの1つであると言われている。本研究は、先行研究における複合動詞の習得についての考え方を検討した上で、実際に日本語母語話者が使用している複合動詞とは何かという観点から、学習者に「最小限」必要な複合動詞を導入することを提案し、優先的に教えなければならない複合動詞を探る。つまり、選択的に習得すればよいと提案することによって、すべての複合動詞を習得しなければならないという心理的負担から開放して学習意欲を高め、効率的に複合動詞を習得することを目指す。そのため、日本語母語話者に読まれている週刊誌を調査し、どのような複合動詞が使用されているかを考察する。

2 先行研究

先行研究には、現在の複合動詞の習得問題について論じているものがいくつかある。松田(2004:2)では、「複合動詞の結合条件」、「単純動詞と複合動詞の使い分け」、「習得方法」の3点が学習者にとって習得の困難点であると述べている。松田(2004)が指摘しているように、これらの点が複合動詞の習得に困難をもたらしている要因といえる。上記の問題点を解決するための提案として、何(2010a, 2010b)が

挙げられる。何(2010a)は、コーパスを用いて選び出した使用頻度が高い複合動詞例について学習者の習得状況を調査した。また、何(2010b)は、これまで先行研究では注目されていなかった学習者の複合動詞全体の習得に注目し、学習者が複合動詞をどれくらい理解しているかをアンケート調査で調べ、複合動詞の理解及び使用実態を検証した。何(2010a, 2010b)により、学習者による複合動詞の習得状況及び誤用の実態が明らかになった。しかし、時間的な制限や学習意欲の低下などの理由で膨大な数の複合動詞をすべて教えることは非常に難しい中、優先的に教えなければならぬ複合動詞を決める手がかりはまだ見つけられていない。では、教材開発の視点からは、複合動詞の導入についてどのように考えられているのだろうか。森(2011:57)では、初級で教えるべき文法項目について、学習者の習得状況を考慮して必要な項目や定着しにくい項目を探すことは日本語教育文法にとって有益な分析であるが、その前に「そもそも日本人が使っているのか」ということを明らかにする必要があると指摘している。田中(1996, 2004)では、複合動詞は日本語の教科書の学習項目としてほとんど取り上げられていないと指摘している。先行研究の指摘通り現在の日本語教科書でも複合動詞はあまり取り上げられていないのだろうか。これについて調べるため、何(2012)では、現在市販されている、2000年以降に出版された中・上級日本語教科書を6種類選出し、索引または語彙リストに掲載されている複合動詞を調査して出現頻度の高いものを提示した。選出した教科書は下記の通り(出版年の古い順)である。

- a 書名:『日本語中級 J501—中級から上級へ—』(以下、J501)
出版社/出版年:東京:スリーエーネットワーク, 2001年
- b 書名:『上級日本語教科書 文化へのまなざし』(以下、まなざし)
出版社/出版年:東京:東京大学出版会, 2005年
- c 書名:『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 56 中級前期』(以下、中 56)
出版社/出版年:東京:スリーエーネットワーク, 2007年
- d 書名:『みんなの日本語 中級 I』(以下、MI1)
出版社/出版年:東京:スリーエーネットワーク, 2009年
- e 書名:『上級へのとびら コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語』
(以下、とびら)
出版社/出版年:東京:くろしお出版, 2009年
- f 書名:『ニュースの日本語 聴解 50』(以下、ニュース)
出版社/出版年:東京:スリーエーネットワーク, 2010年

何(2012)で調査した日本語教科書6種類に掲載されている複合動詞の数(異なり語数のみ)と、複合動詞の出現頻度の高い順を以下の通り示す。

書名	異なり語数
『J501』	113
『まなざし』	90
『中 56』	24
『MI1』	27
『とびら』	27
『ニュース』	24

教科書に採用されている複合動詞の内訳は以下のようにまとめられる。

出現回数	異なり語数	複合動詞例
5回	1	取り入れる
4回	1	落ち着く
3回	7	取り上げる、引き受ける、思い込む...
2回	32	取り組む、受け入れる、作り出す...
1回	211	思い出す、受け取る、見上げる...

筆者は文法項目だけでなく、複合動詞のような語彙の習得についても同じようなことが言えると考えます。つまり、限られた授業時間の中で、学習者には一般的に使用頻度の高い複合動詞を教えるほうがより効果的であろうということである。「日本語母語話者が使っている複合動詞はどのようなものなのか」という疑問に答えるために、彼らが日常的に使っている言語資料を調査する必要がある。

3 本稿の目的

本研究の目的は、日本語母語話者が日常的に利用している言語資料、つまり、雑誌を通して日本語母語話者にとって知らなければならない頻繁に使われる複合動詞を特定し、先行研究では言及されていない複合動詞導入の優先順位を決める手がかりを探ることである。石井(2007)によると、複合動詞の数は約2,500語に上っている。確かに、すべての複合動詞を習得するのは無理があり、またその中には日本語母語話者もあまり使用していないものが含まれているので、せっかく習っても使う機会がない場合もあると考えられる。複合動詞の習得を促進するためには、まず日本語母語話者がよく使用する複合動詞を洗い出す必要がある。

4 調査対象及び方法

4.1 調査対象

朝日新聞出版発行の週刊誌『アエラ』(AERA)は、時事問題関連の記事を中心とした週刊誌である。正式には『朝日新聞ウィークリー AERA』という。社団法人日本雑誌協会のデータによると、2008年～2011年の間『アエラ』の印刷証明付発行部数は約15～16万部(3か月ごと)としている。発行部数から見るとほかの女性週刊誌などと比較して必ずしも高いとはいえないが、上級日本語学習者にとって日本語母語話者によく読まれている、時事問題関連の読み物に出てくる語彙や表現は重要な学習資料であるため、本研究はそれを調査対象にした。

4.2 調査方法及び結果

本研究では、2006年から2011年までの6年間に発行された週刊誌『アエラ』計140冊を調査した。出現頻度(延べ語数)の順位1から100までの結果は下記の通りである。

順位	V1(読み)	V2(読み)	V1(書き)	V2(書き)	出現頻度	教科書
1	とり	くむ	取り	組む	789	○
2	で	あう	出	会う	709	×
3	くり	かえす	繰り	返す	649	○
4	ふり	かえる	振り	返る	618	×
5	み	つける	見	つける	591	○
6	うけ	いれる	受け	入れる	447	○
7	おもい	だす	思い	出す	429	○
8	つき	あう	付き	合う	414	○
9	うみ	だす	生み	出す	405	×
10	み	つかる	見	つかる	389	○
11	で	かける	出	掛ける	380	×
12	むき	あう	向き	合う	312	○
13	たち	あげる	立ち	上げる	305	×

14	とり	あげる	取り	上げる	305	○
15	うけ	とる	受け	取る	294	○
16	ひき	だす	引き	出す	275	○
17	もり	あがる	盛り	上がる	260	×
18	のり	こえる	乗り	越える	251	○
19	おち	こむ	落ち	込む	248	○
20	うけ	とめる	受け	止める	243	×
21	おち	つく	落ち	着く	237	○
22	はなし	あう	話し	合う	235	○
23	み	つめる	見	つめる	224	×
24	み	まもる	見	守る	220	×
25	くみ	あわせる	組み	合わせる	218	○
26	とり	もどす	取り	戻す	214	○
27	とり	いれる	取り	入れる	202	○
28	うち	だす	打ち	出す	200	○
29	しり	あう	知り	合う	200	○
30	もち	こむ	持ち	込む	197	○
31	ひき	うける	引き	受ける	196	○
32	うち	あける	打ち	明ける	191	○
33	み	なおす	見	直す	190	○
34	うけ	つぐ	受け	継ぐ	182	○
35	よび	かける	呼び	掛ける	180	○
36	とび	だす	飛び	出す	178	○
37	まき	こむ	巻き	込む	178	○
38	おい	こむ	追い	込む	172	○
39	みい	だす	見	出す	168	×
40	なり	たつ	成り	立つ	165	×
41	ひっ	ぱる	引っ	張る	164	○
42	とび	こむ	飛び	込む	161	×
43	いい	きる	言い	切る	159	×
44	つくり	あげる	作り	上げる	159	○
45	かき	こむ	書き	込む	158	×

46	かけ	つける	駆け	付ける	158	×
47	たち	あがる	立ち	上がる	155	×
48	とり	だす	取り	出す	155	×
49	たどり	つく	辿り	着く	149	○
50	くり	ひろげる	繰り	広げる	146	○
51	あり	える(うる)	有り	得る	145	×
52	もり	こむ	盛り	込む	145	×
53	きり	かえる	切り	替える	144	×
54	はなし	かける	話し	掛ける	142	○
55	み	こむ	見	込む	142	○
56	のり	だす	乗り	出す	140	○
57	むすび	つく	結び	付く	139	○
58	うかび	あがる	浮かび	上がる	137	○
59	おい	かける	追い	掛ける	134	○
60	ふみ	きる	踏み	切る	133	×
61	いい	だす	言い	出す	129	×
62	うち	こむ	打ち	込む	129	×
63	ひき	おこす	引き	起こす	128	○
64	つくり	だす	作り	出す	127	○
65	つつ	こむ	突っ	込む	126	○
66	ひき	つぐ	引き	継ぐ	126	○
67	おくり	だす	送り	出す	125	×
68	し	あげる	仕	上げる	120	×
69	に	あう	似	合う	118	×
70	のり	こむ	乗り	込む	117	×
71	うつし	だす	映し	出す	114	×
72	もうし	こむ	申し	込む	113	×
73	もり	あげる	盛り	上げる	111	○
74	きり	だす	切り	出す	107	×
75	み	のがす	見	逃す	107	○
76	もうし	うける	申し	受ける	107	×
77	とり	こむ	取り	込む	105	○

78	ぬけ	だす	抜け	出す	105	○
79	ひき	あげる	引き	上げる	103	○
80	み	かける	見	掛ける	103	○
81	もち	かける	持ち	掛ける	101	×
82	おい	つめる	追い	詰める	100	×
83	おい	つく	追い	付く	98	○
84	ふみ	だす	踏み	出す	98	×
85	とび	かう	飛び	交う	97	×
86	いき	のこる	生き	残る	96	×
87	ひっ	こす	引っ	越す	96	○
88	より	そう	寄り	添う	96	○
89	おもい	つく	思い	付く	95	○
90	のり	きる	乗り	切る	93	×
91	つき	つける	突き	付ける	92	×
92	うごき	だす	動き	出す	91	×
93	おもい	こむ	思い	込む	91	○
94	み	きわめる	見	極める	91	○
95	おし	つける	押し	付ける	90	○
96	ふみ	こむ	踏み	込む	90	×
97	ふり	まわす	振り	回す	89	○
98	もうし	あげる	申し	上げる	89	×
99	かたり	あう	語り	合う	88	×
100	むすび	つける	結び	付ける	88	×

※○印：教科書に採用されている複合動詞

×印：教科書に採用されていない複合動詞

※※一体化していると思われる語：

見つける(順位 5)、見つかる(順位 10)、出掛ける(順位 11)、
似合う(順位 69)、申し上げる(順位 98)

出現頻度の最も高い複合動詞 10 語が使われている文は、以下のように掲載されている。

1 医師団の会見の<雅子妃は元来精神的健康度が非常に高くていらっしゃる>と

いう通り、献身的な女官や看護婦に支えられながら、前向きに治療に取り組んでいる。

「現代の肖像 雅子妃殿下 苦悩のプリンセスが歩む道」
Vol. 19, No.1, 2006年1月2～9日, p. 71

- 2 漫画を立ち読みする少年など、もしかして昔の自分？と思えるような写真に出会う展覧会、「日本の子供60年」が、東京都写真美術館で2006年1月9日まで開かれている。

「子どもの姿に映る戦後」
Vol. 19, No.1, 2006年1月2～9日 (p. 60)

- 3 アメリカの農業は穀物でも野菜でも、結局は水問題で、その水問題の解決のために灌漑と地下水のくみ上げを繰り返してきた。

「養老孟司、池田清彦、吉岡忍 本の読み方」
Vol. 19, No.2, 2006年1月16日 (p. 65)

- 4 会社員時代、糸山さんはシステムキッチンやユニットバスなどの販売を手がける営業職だった。「上司や工場の担当者と納得がいくまで話し合うタイプだった」と、本人は振り返る。

「バブル入社組共感の訳」
Vol. 19, No.4, 2006年1月30日 (p. 33)

- 5 その上で、福沢さんは上司や先輩の中から自分の得意分野を認めてくれる人を見つけ、必要とされる存在になることを勧めている。

「横、斜めの人脈を生かす」
Vol. 19, No.2, 2006年1月16日 (p.17)

- 6 激しい腰痛を患い、座れなくなっても、夏樹さんは書き続ける。やがて医師に心身症と診断され、休筆を受け入れる。

「シナプスのつぼ 23 井上由美子—脚本家」
Vol. 19, No.2, 2006年1月16日 (p.78)

- 7 林は当時を振り返る。新しい庇護者の登場が、少女の頃の見捨てられた不安を思い出させたのだろう。農協や町工場のバイトを転々としながら、好きな人と暮らすパートの主婦の生活に満足していた。

「現代の肖像 ダイエー会長兼 CEO 林文子 営業に恋したセールスレディー」

- 8 そのひと個人の価値が希薄に感じられる世の中にあつて、占いは『自分はナニモノなのか』ということを探る時間にほかなりません。合理的なもの、数値化や記号化されたものに息苦しさを感じた時、神秘的なものとうまいに付き合おうとする日本人のバランス感覚は実に見事です。

「省エネ志向のエハラ一現象」

Vol. 19, No.9, 2006 年 2 月 27 日 (p.50)

- 9 中でも最大の理由は、スター候補が勢ぞろいしていることだ。大会ごとにスーパースターを生んできた W 杯が、今度はどんなスターを生み出すのか。

「06ドイツW杯 記者300人と22人の応援団」

Vol. 19, No2, 2006 年 1 月 16 日(p.39)

- 10 息子も一生懸命働いて家族を養っている父親に対しては感謝の気持ちは持っていたようだ。しかし、一方で父親と同じような平々凡々としたサラリーマン人生は嫌だ、という気持ちもあった。何かこれは、というものが見つかれば、それなりに頑張るつもりでいた。

「メールで見せた堀江貴文もう一つの顔」

Vol. 19, No.6, 2006 年 2 月 13 日 (p.26)

5 結果分析

本研究で調査対象とした週刊誌『アエラ』140 冊中に掲載されている複合動詞の中で出現頻度の最も高い 100 語を上を示したが、これらの複合動詞がどれぐらい現在の中・上級日本語教科書に採用されているかを何(2012)と比較して調べた。その結果は下記の通りである。

- 1 『アエラ』に掲載されている複合動詞の中で出現頻度の最も高い 100 語うちの 57 語が教科書にも採用されている。つまり、採用率は 57% である。
- 2 『アエラ』に掲載されている複合動詞の中で一部の一体化していると思われる語(見つける(順位 5)、見つかる(順位 10)、出掛ける(順位 11)、似合う(順位 69)、申し上げる(順位 98))を除き、出現頻度の最も

高い 95 語うちの 55 語が教科書にも採用されている。採用率は 57.89%である。

- 3 『アエラ』に掲載されている複合動詞の中で出現頻度の最も高い 50 語うちの 33 語が教科書にも採用されている。つまり、採用率は 66%である。
- 4 『アエラ』に掲載されている複合動詞の中で一部の一体化していると思われる語(見つける(順位 5)、見つかる(順位 10)、出掛ける(順位 11))を除き、出現頻度の最も高い 47 語うちの 31 語が教科書にも採用されている。採用率は 65.96%である。教科書に採用されていない複合動詞は下記のようなものである。

出会う(順位 2)、振り返る(順位 4)、生み出す(順位 9)、立ち上げる(順位 13)、盛り上がる(順位 17)、受け止める(順位 20)、見つめる(順位 23)、見守る(順位 24)、見出す(順位 39)、成り立つ(順位 40)、飛び込む(順位 42)、言い切る(順位 43)、書き込む(順位 45)、駆け付ける(順位 46)、立ち上がる(順位 47)、取り出す(順位 48)など。

『アエラ』に掲載されている複合動詞の中で出現頻度の高い語のほとんどは、「食べ始める」、「話し続ける」、「読み終わる」のようなアスペクトを示す統語的複合動詞ではなく、語彙的複合動詞(影山(1993))である。語彙的複合動詞は、前項動詞と後項動詞の意味構造によって1つの組み合わせになれるかどうかで決まる。1つの語として前項動詞と後項動詞が密着している語彙的複合動詞は、一見組み合わせが豊富(生産性が高い)に見えるが、統語的複合動詞のように前項動詞と後項動詞なら何でも自由にくっつけることができるわけではない。言い換えれば、学習者の判断で間違った複合動詞を作ってしまう可能性がある。このような間違いを避けるために、体系的に複合動詞を導入する必要がある。

6 おわりに

本研究は日本語母語話者が利用している週刊誌を使って複合動詞の出現頻度について調査を行った。本研究の結果を見ると、教科書に掲載されている複合動詞のリストと日本語母語話者が利用している時事問題関連の週刊

誌に入っている複合動詞は必ずしも一致しているとはいえない。今後、日本語母語話者によく利用されている読み物に掲載されている複合動詞を参考にしながら学習者のための複合動詞教材開発を行うことを提案したい。

謝辞

本研究は、Research Grants Council, Hong Kong による"General Research Fund for 2011/2012"研究助成金(課題名称:"The Usage of Japanese Compound Verbs"、課題番号:445811)を受けて実施したものです。

参考文献

- 石井正彦 (2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
何志明 (2010a)「香港の上級日本語学習者による日本語複合動詞の習得に関する調査」『東洋文化研究』第 12 号, pp. 491-510.
何志明 (2010b)「習得しやすい日本語複合動詞とは何か?—香港人中上級日本語学習者の習得及び使用実態予備調査を通して」『日本語/日本語教育研究』1, pp. 227-244. 日本語/日本語教育研究会
何志明 (2012)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び中上級日本語教科書における複合動詞の出現頻度」『日本語/日本語教育研究』3 pp.261-276. 日本語/日本語教育研究会
田中衛子 (1996)「複合動詞—日本語学習者の教育項目として—」『名古屋大学 日本語・日本文化論集』第 4 号, pp. 83-100. 名古屋大学留学生センター
田中衛子 (2004)「類義複合動詞の用法—考—日本語教育の視点から—」『愛知大学語学教育研究室紀要 言語と文化』第 10 号, pp. 63-79. 愛知大学
松田文子 (2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』ひつじ書房
森篤嗣 (2011)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』コアデータにおける初級文法項目の出現頻度」森篤嗣・庵功雄(編)『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp. 57-78, ひつじ書房